

ギターと私(6)ーサラリーマン時代①

何とか4年で大学を卒業した私は、世間並みに会社員になった。大きく分ければ、繊維関係の会社であった。最初の一年は、社内研修ということで工場勤務、後の二年は営業職で、ほぼ日本中を飛び回った。つまり、三年間しか在職しなかったということだが、最初からその程度の覚悟しかない就職で、こんな私に就職された会社は、いい迷惑だったろう。

さて、社会人一年生の時は、ギターをほとんど弾いてなかったと思う。社会人二年生になり、やや生活に余裕が出てきた頃、私は、野村芳生先生に師事した。年号でいえば、昭和52年(1977年)のことであった。先生は、1971年に「第14回東京国際ギターコンクール」に第3位入賞され、1976年にフランスへ留学、A. ポンセに師事された。私が師事したのは、フランス留学から帰国された直後だったということになる。ただし、そういう経緯はすべて後日知ったことで、当時の私には知る由もなかった。ということは、何も知らずに野村先生に師事した私は、かなり運が良かったと言えるだろう。

野村先生には、ギターはもちろんのこと、クラシック音楽一般他を教えていただいた。よく世間で、「私が今日あるのは、先生のおかげです。」という物言いを耳にするが、私の場合は、掛け値なしにその言葉があてはまる。1982年(昭和57年)11月に「第16回新人ギター演奏会」に二度目の出演をし、翌12月に岐阜県婦人会館で先生とのジョイントコンサートを開催するまでの5年間は、かけがえのない年月であった。この間、数々のコンクールにも挑戦したが、一次予選は通っても二次予選の壁を破ることはできず、本選に残ることはできなかった。

やや傲慢に聞こえるかもしれないが、当時の私には、技量的にコンクールに入選する力はあったと思われる。ただ、何かが不足していた。その何かがわかるまでにはなお数年の時が必要だったのだが、私は、失意のままに「野村芳生ギター教室」を退会した。

その間、私は学習塾の講師になっていた。大学受験の時にお世話になった、当時大学生だった先生が、卒業して学習塾を経営していらっやっしたので、ちゃっかりお世話になったのである。塾長に勧められるままに、教員免許を取得するため大学に聴講生として戻ったのも、この頃であった。学生時代には、漠然とではあるが、サラリーマンと先生だけにはなるまいと思っていたが、卒業後5年もしないうちに、両方とも経験することになったわけである。

野村先生の教室をやめて、あまりギターも弾いていなかった私に、30歳の頃に転機が訪れた。某私立高校が先生にならないかと声をかけてくださったのである。私は、大いに迷った。ギターもこれといった結論が出ないままだし、高校教師という安定した職業に魅力を感じたのである。結論的には、私は、そのありがたいお話を丁重にお断りした。午前中は自由になる学習塾の講師生活になじんでいたこともあったが、やはりギターを弾く時間を確保したいという気持ちが働いたのだと思う。その割には一生懸命練習した記憶もないが、私は、学習塾の先生として生活し、趣味としてギターを弾く道を選んだのであった。一つには、ギター以外に自分のアイデンティティを見いだせない自分を自覚していたからであったろう。平たく言えば、ギターにしがみつくしか自分を自分として認める方法がなかったのである。

友人たちは、次々に結婚していく。特に親しくしていた四人組の最後に残された私は、歓楽街を彷徨い、飲めもしない酒に溺れたりした時期もあったが、またまた何とか結婚相手が見つかって家庭を持った。まもなく、父親を病気で亡くすことになるこの時期は、まったくといっていいほどギターを弾かなかった。

(2019.11.22 記)